

「留学終了報告書」

学部・学科：国際学部・国際学科・中国語専攻

留学先大学：吉林大学（中国）（オンライン）

① 留学中の活動詳細（授業内容、生活のこと、費用のこと等）

12月 は、年末の焦燥感も手伝って、一か月が非常に短く感じた。12月初旬には卒業論文を提出したが、23日より吉林大学でのテスト期間を控えていたため、気の抜けない年末を過ごした。

テストに向けラストスパートをきるなか、コロナに感染し体調を崩す先生もいた。そのころ中国は、ゼロコロナ政策が緩和されてから数週間がたっていた。身近な知り合いが感染したという状況において、先生方の会話や、授業内での雰囲気からのみではあるが、緩和前と後のコロナに対する意識の変化を感じられた。先生は、感染後も基本的には「日常」を送っているようで、我々への授業も体調を鑑みながら継続した（体調が悪くても仕事を休めない現実には少々問題を感じるが）。

約3か月つづいた授業が終わりを迎え、テスト期間がはじまった。問題の解答中はカメラを付ける決まりで、クラスメイトの顔をはじめて知ることができた。私自身感動したのはもちろん、画面上に集う私たちをみて喜ぶ先生の表情が忘れられない。

② 留学の成果について

今月は、語学学習者としての自身の弱みを知ることができた。弱みは、ボキャブラリーの少なさである。留学以前の中国語での日常会話は、自身の興味ある分野・話題で会話をすることが多かった。しかし、授業では、興味の有無に関わらずあらゆる話テーマについて話さねばならず、自身の関心のない話題になると、その分野に関する知識・中国語の語彙が乏しく、会話を続けるのが非常に難しかった。中国語でさらに広い世界をしり、さらに幅広い会話を楽しむためにも、語彙力の強化が必要だと感じた。

留学全体を振り返っては、中国語は「コミュニケーションの道具」であると再認識できた。この3か月を振り返って楽しかったのは、授業内での意見交換、先生や生徒との雑談など、中国語を使って「ただ話す」ことだ。正解不正解も目的もなく、ただ会話を楽しむ時間を持ち、改めて言語はツールであると実感できた。まもなく社会人となり中国語との距離は離れるが、自分のペースで学びを続け、言語を通して得た知識や経験を忘れずにいたい。

③ 反省点について

発音課題・ピンインからしっかり学びなおしをする。中国語を学び始めてから長くなり、曖昧に発音してしまうクセがある。言語はツールとの認識は変わらないが、伝わるから良いと甘えず、丁寧に学びなおして高いレベルの中国語を身につけなければならない。